

【助成 39-50】

「心の目」の欠如:国内における新奇事例「アファンタジア (aphantasia)」の提唱

代表研究者 福島大学人間発達文化学類 准教授 高橋純一

〔研究の概要〕

アファンタジア (aphantasia)とは、実際の知覚は機能しているもののイメージ形成が難しい状態である。アファンタジアの同定方法は確立されておらず、出現率やイメージ特性も十分には検討されていない。本研究ではウェブを用いた大規模調査を行うことで、アファンタジアの出現率とイメージ特性(多感覚イメージ)の検討を行った。その結果、アファンタジアの出現率は 3.9%(視覚イメージ鮮明性の基準)および 12.2%(自己報告法の基準)であった。また、多感覚イメージについては、アファンタジア群(VVIQ \leq 32)において全ての感覚モダリティのイメージ形成が難しい当事者、特異的に視覚イメージの形成が難しい当事者など様々なタイプの存在が明らかとなった。

〔研究経過および成果〕

本研究は、大規模調査によりアファンタジアの出現率の推定およびイメージ特性(多感覚イメージ)について検討することを目的とした。

方法

調査参加者 1,050名の回答を収集し、不備のある回答と重複回答を除いた 1,032名を分析対象者とした(男性 545名,女性 478名,無回答 9名;平均年齢 = 40.6歳, $SD = 10.5$)。本研究の実施は、福島大学研究倫理委員会の審査を完了した(2021-01)。

質問項目 ①回答者の属性(性別,年齢,最終学歴,職業),②イメージ鮮明性(QMI [Questionnaire upon Mental Imagery]: Betts, 1909),③視覚イメージ鮮明性 (VVIQ [Vividness of Visual Imagery Questionnaire]: Marks, 1973),④認知スタイル(VVQ [Verbalizer-Visualizer Questionnaire]: Richardson, 1977),⑤自己報告(家具や顔の視覚イメージの想起の可否)について尋ねた。⑤について「あまりイメージできない」あるいは「イメージできない」と回答した場合は、さらに 19項目の自由記述への回答を求めた

(Zeman et al. [2015] を参照して作成した)。

手続き 調査会社を通して、オンライン・サンプリングにより5回に分けて実施した。

結果と考察

アファンタジアの出現率 収集したデータから、VVIQによるアファンタジアの出現率を算出した。VVIQの基準(VVIQ \leq 32: Dance et al., 2022; Zeman et al., 2015)を用いて出現率を算出したところ、3.9%(40名)であった。先行研究でも3.9%と報告がある(Dance et al., 2022)ことから、本研究のVVIQを用いた出現率はDance et al. (2022)を再現したと考える。

次に、自己報告法によるアファンタジアの出現率を算出した。「あまりイメージできない」あるいは「イメージできない」と回答した割合を算出したところ、12.2%(126名)であった。自己報告法を用いたアファンタジアの出現率については、過去に報告がない。アファンタジア研究の文脈ではないがFaw (2009)が類似した調査を行っており、イメージ想起が難しい割合は10-11%であった。本研究の自己報告法を用いた出現率はFaw (2009)の結果と類似したものと言える。

アファンタジアのイメージ特性(多感覚イメージ) 感覚モダリティの観点からアファンタジアのイメージ特性を検討するため、VVIQの基準(VVIQ ≤ 32: Dance et al., 2022; Zeman et al., 2015)に該当する者をアファンタジア群と定義し、QMIの下位因子(視覚, 聴覚, 触覚, 体性感覚, 味覚, 嗅覚, 内臓感覚)の評定平均点からz得点を算出した上でクラスター分析(ward法)を行った。その結果, 3つのクラスターを抽出した(それぞれクラスター1, 2, 3とする)。それぞれの因子においてクラスターを参加者間要因とした一要因分散分析を行うことで, 各クラスターの特徴を検討した。その結果, 全ての因子においてクラスターの主効果が見られ($6.04 < F < 42.26, p < .001$), 多重比較から, 聴覚ではクラスター1 = 2 < 3の順にz得点が高くなったが, その他の感覚ではクラスター2 < 1 < 3の順にz得点が高くなった($2.04 < t < 8.73, p < .05$)。以上から, 全ての感覚モダリティについてクラスター1と2は3よりもイメージの想起が難しいこと, さらにほとんどの感覚モダリティでクラスター2の方が1よりもイメージ想起が難しいが, 聴覚については両者で違いが見られないことがわかった。

まとめ

本研究では, VVIQと自己報告法を用いたアファンタジアの出現率の推定, および多感覚イメージにおけるイメージ特性の検討を行った。出現率については, VVIQによる出現率(3.9%: Dance et al., 2022)および自己報告法による出現率(10-11%: Faw, 2009)と類似した結果であった。またイメージ特性については, アファンタジア群(VVIQ ≤ 32)において, 全ての感覚モダリティでイメージ形成が難しい者, 特異的に視覚イメージのみイメージ形成が難しい者が存在した。

本研究の結果から, VVIQだけでなく自己報告法

や多感覚イメージを考慮することで, アファンタジアを定義する基準やサブタイプの理解につながると言える。今後は, 様々な尺度を用いることで, アファンタジアの定義についてより精度を高める必要がある。そのうえで, アファンタジアの存在について, 社会における理解促進が期待される。

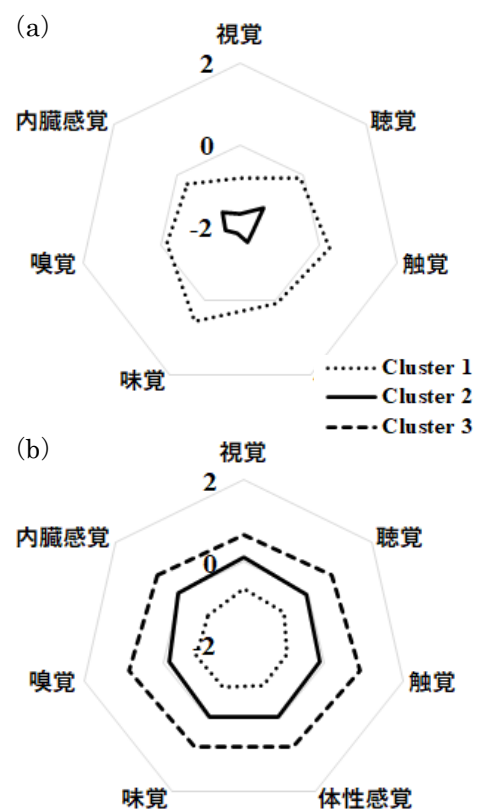


図1 感覚モダリティどうしの関連. (a)はアファンタジア群(VVIQ ≤ 32), (b)は統制群のプロフィールを示す.

[発表論文]

1. Takahashi, J., Saito, G., Omura, K., Yasunaga, D., Sugimura, S., Sakamoto, S., Horikawa, T., and Gyoba, J. (2022). Diversity of aphantasia revealed by multiple assessments of the capability for multi-sensory imagery. *PsyArXiv*.

<https://doi.org/10.31234/osf.io/pucsm>